

『現代と保育』編集部(編)  
『忘れない！ 明日へ共に—東日本大震災・原発事故と保育—』  
2012年 ひとなる書房 A5判 145頁 定価（本体1400円+税）

佐藤嘉代子\*

本書は8名の執筆者による、東日本大震災・原発事故と保育を全国の保育者に向けて被災地の言葉で紡いだものである。その構成を目次により示すと次のようになる。

岩手：命の重さを抱きしめて  
バトンをつなぐ  
福島：学び合い、考え合い、支え合う  
おれたちは、もう外で遊びたいんだ！  
親しい友人の話に耳を傾ける気持で  
宮城：命の視点から保育と保育制度を問う  
街の復興、心の復興  
子どもたちが問いかける「もう一つの生き方」

本書では章立てが県名で表示されている。各章のなかで、評者が特に注目した内容は被災当事者とそのまとめの内容である。岩手の章では、保育園園長による「命の重さを抱きしめて」で、子どもたちと避難した状況と、その後子どもたちとどうむきあってきたかが述べられ、「どんなにつらい事でも逃げずに正面から向き合おうとちかいあった職員(仲間)との大切な時間」が語られる。

震災時の状況は小項目のタイトルそのまま緊迫感のある叙述となっている。「5分で避難、電信柱が倒れてる！、寒さと恐怖の中で、迫る火炎、おばあちゃん生きて！」。そして「子どもたちを保護者の元へ」に至ってようやく文体の緊張感も和らぐ。その後、保育士を辞めようと思いつながらも「命を救ってくれてありがとうございました」との保護者の言葉に押され、保育園の再開をめざす過程が述べられ、そして保育園再開後は震災について向き合う保育が語られる。「子どもたちには本当のことを伝えます」と「天国に召された子ども達のことを伝える決意」をいだきつつも、子どもの率直な言葉「園長先生がさっ！Tちゃんたちにお家に帰らないで！って言えばよかったですじゃん！！」に直面し、また遊びのなかで繰り返される「津波ごっこ」など「じかに子どもとかかわる保育士たちにはつらいことだった」と記される。そして、「大人が逃げれば子どももずっと逃げる」、「保育士として、大人としてあるべき姿をしっかりと子どもたちに見せていくことが震災を乗り越える原動力となることを子どもから教えられているような気がする」と省察している。一方、「『遠い地』での論議は被災地とかなりの温度差を感じてならない」と「子ども・子育て新システム」について触れ、「保育園という現場は『子守り』としか捉えられていないのか…」、「保育園はトータルで成長過程をみてあげることができる『教育の場』だと私は思う」と結んでいる。

---

\*お茶の水女子大学大学院博士課程

福島の章は、2012年2月11日に行なわれた、お茶の水女子大学 ECCELL 主催シンポジウムでの講演をもとに再構成されたものである。保育者の立場からの「学びあい、考え合い、支え合う」では、放射能を理性的に恐れることを学ぶことから始めた保育、保護者との懇談をとおして放射能の線量を測りながらの保育が語られる。窓を開け「風を受ける」というささやかで当たり前のことできたとき(4月)の子どもたちの喜び、はじめて外に乳母車で出た日(10月)のこと、雪があると線量が下がり外で遊べること(2012年1月)などの子どもの姿が語られる。そのような日々がある一方で「国から一方的な『収束宣言』が出されても私たちの生活中ではまだまだ放射能の影響は大きく、なくなっています」と原発への思いを述べている。

保護者の立場では、放射能に対する知識を身につけること、保育士と保護者、保護者同士のつながりを大事にすることに力をいれながら、みんなで創意工夫して行事を楽しむようになった保護者の繋がりが記される。しかし果物が収穫されず放置される光景と向き合う生活、福島を離れる家族、どちらの生活を選択するかの苦悩をかかえる保護者、そのような生活のなかで子どもたちが一番の被害者であることに気付かされた経緯が語られる。放射能について教えてくれた医師の「どちらの決断も、わが子を思う愛情です。それが子どもを守るのです」という言葉に支えられた福島の生活がある。“なくせ原発！10・30 集会”に参加する次男の「おれたちは、もう外で遊びたいんだ～！」との叫びのプラカードを胸にする姿に「子どもたちの表情はとても真剣で怒りにみちていました」と保護者自身の生活の一端を述べている。そして「被災地以外で暮している人にとっては過去のものになることかもしれません、私たちは、自分達で必死に学習し、みんなで力を合せて実践てきて、やっとスタートラインがみえてきた現状をみなさんに知ってもらいたい」と記述している。

宮城の章「命の視点から保育と保育制度を問う」では、震災の状況とその報道記事における子ども達の犠牲の取り扱いについて触れ、無認可保育園の経営・運営・保育の立場からの提言がされている。「保育中の園児死亡ゼロ…避難訓練・機転が命守る」(『読売新聞』2012年5月14日付)の報道の後、「保育中の園児3人死亡、三ヶ月放置のあきれた『言い訳』」(『週刊朝日』6月24日)に至る経緯から、行政と現場の＜保育＞に対する認識のズレが発露される。「津波に遭ったのが敷地を出たとこの駐車場だったので、保育中(管理下)と言えないかもしれない」との議論があつたため、最終的に保育中と判断するまで時間がかかったことである。それをふまえ、保育の責任の所在をめぐっては「公立と私立、無認可で災害時の対応の差が大きい。同じ市民の子の命が平等にあつかわれていないのは問題」と述べ、さらに「新システム」では「『子どもは社会の宝』としながらも、実際には公的には守られないような方向で新しい保育制度が審議されようとしている」と述べている。

本書の意義は「子どもたちが問いかける『もう一つの生き方』」において、「『人間の復興』に子どもの存在は欠かせない」、「子どもの声には、物事を根本から問いただすエネルギーがあるのだと思う。もっと『別な生き方』があるのではないかという大きな問いかけがある」、「子どもの問いは一見非現実的だが、別な希望が現実にあることに気づかせてくれる」という言葉に集約される。そして「ぼくは、原発が生まれる前の時代に生まれたかった」という言葉とともに、被災者・子どもの存在を「忘れないで！」と想起させることにある。